

1 学校教育目標	
(1) 誠実さと奉仕の精神を持ち、高い志を掲げ、他者と協働して集団や社会に貢献できる生徒の育成 (2) 文武両道に励み、物事に屈しない強い確かな意志と逞しい精神力を身につけた生徒の育成 (3) 自ら模範となり主体的に学習や課題解決に取り組む豊かな知性と感性を備えた生徒の育成	

2 本年度の重点目標	
(1) 教育スローガン	「健康・礼儀・努力・継続」～何事にも一生懸命頑張る玉高生・玉附生～ 健康：健やかな体、豊かな心（読書）、確かな学力 礼儀：礼に始まり礼に終わる（校門一礼）、挨拶、時間厳守、掃除、感謝 努力：努力に勝る天才はなし 目標達成、感動、笑顔 継続：継続は力なり 当たり前のことを当たり前に

3 自己評価総括表					
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価
大項目	小項目				成果と課題
学校経営	学校の魅力化	併設型中高一貫教育校としての取組の充実	生徒・職員・保護者が、学校の魅力について明確に表現できる教育実践を重ねる。	①教育実践の内容と育てたい資質・能力を明確にして取り組むことで、生徒・職員の達成感につなげる。 ②教育実践の中で、学校の魅力を具体的に整理する。	B
	業務改善・働き方改革	直後プランの実施と高校との連携による計画的な業務遂行	見通しをもつことにより、情報共有・協働しながら計画的に業務遂行し、業務削減や効率化につなげる。	①行事が終了した時点で反省・改善を行い、次年度の計画を立案する。 ②業務担当者とその方法を明確にし、高校と情報共有しながら業務遂行する。	B

学力向上	質の高い授業の工夫と実践	将来の学びに通じる授業の実践	質の高い授業を実感できる生徒が9割以上にする。	①先取り学習、高校職員による講座、探究活動や模擬試験、検定等の充実に取り組む。 ②ＩＣＴ機器を効果的に活用した授業改善と個に応じた教材開発に取り組む。 ③ＲＳＴの結果に基づき振り返りを行い、読解力の向上を図る。	A	【成果】日々の教科の授業や総合的な学習の時間、教科の専門性を發揮した講座等の取組を行い、98%の生徒が工夫された質の高い授業が行われていると実感している。 【課題】学期ごとのＲＳＴの振り返りを充実させ、更に読解力を向上させていく必要がある。
	個に応じた学習指導の工夫改善	一人一人に達成感のある学習指導の実践	一人一人に応じた学習指導を実感できる生徒が9割以上にする。	英語・数学では習熟度に応じた展開授業を取り入れることで、個に応じたきめ細かな指導を行う。	A	【成果】ノート添削など各生徒への丁寧な指導を行い、生徒の9割近くが一人一人に応じた学習指導を実感することができた。 【課題】今年度も職員不足等教員側の事情により、数学や英語の習熟度別授業を十分に行うことができなかった。
中高一貫教育	中高6年間を見通した教育活動の充実	中高連携の充実と協働	生徒の現状と高校のグラデュエーションポリシーを踏まえた指導体制の充実を図る。	①単元配列表を作成し、中高における学びの連続性を踏まえた教科指導を実践する。 ②中高職員による職員研修を複数回実施し、6年間の指導体制をブラッシュアップする。	B	【成果】併設型中高一貫教育について全職員が考えるための職員研修を年4回計画的に実施することができた。 【課題】次年度に向けた計画までとなり、指導体制の具体的実践には至らなかった。
キャリア教育(進路指導)	将来の夢や生き方を考える機会の充実	自身の未来像を描き大学や職業について考える機会の充実	学活や道徳、総合的な学習の時間等、将来の夢や人としての生き方を考える機会を適切に設けられないと実感する生徒を9割以上にする。	①中高合同で職業別講話などの進路講演会を実施する。 ②ＲＳＴと学推調査の考察を行い、研修会を開き生徒にフィードバックする。	B	【成果】中高合同の職業別講話を実施できた。具体的数値目標を達成することができた。 【課題】ＲＳＴの分析はより多面的に継続して分析する必要がある。

生徒指導	礼儀を大切にし、自主的・自律的に判断・行動できる生徒の育成	様々な教育活動において自主・自律を育む指導の実践	生活リズム、挨拶や言葉遣い、時間厳守、交通安全、自転車の二重ロック、公共マナーなどの指導をとおして、自主的・自律的な言動を確立させる。	①朝の健康観察を行い、健康の大切さを理解させる。 ②学級活動や全校集会等をとおして、礼儀や規範意識について考えさせる。 ③スマートフォン等の使用ルールについてのアンケートをもとに、全体と個人の振り返りを行う。	B	【成果】 学年団で確実に健康観察ができた。二重ロックや公共マナー等、機会を見つけて指導し「自律」の意識を高めている。 【課題】 大きな問題にはなっていないが、まだまだスマートフォン等の使用ルールは徹底できていない。今後も継続した指導が必要である。
	生徒会・部活動等の活性化	生徒会や委員会活動、部活動をとおした主体性の育成	生徒が主体的、計画的に取り組む生徒会活動を確立させ、愛される玉附を目指す。	①生徒会活動や委員会活動の機会を精選し、内容の充実を図る。 ②計画をもとに、学習と部活動の両立が図れるようにする。	A	【成果】 生徒会活動、部活動とともに、教師の関わり方も適切であり、好成績を残すことができた。 【課題】 学習と部活動の両立に関しては、学習課題の提出に課題がある。
人権教育の推進	自他ともに大切にする人権意識の涵養	差別や偏見に気づきその背景を理解しようとする態度の育成	道徳や学活などを通して、適切な人権教育が行われていると感じる生徒の割合を9割以上にする。	①道徳での取組、学級旗製作、人権標語の作成、人権集会の実施など、生徒が自他の人権について考える機会を設ける。 ②各教科の授業においても人権教育に関する内容に触れ、人権意識の涵養を図る。	B	【成果】 具体的目標は生徒の回答が97.6%で達成することができた。 人権集会も計画的に実施することができた。 【課題】 人権教育に関する授業を当初の計画通りに実施できないこともあったため、学活の時間の確保が必要である。
	「命を大切にする心」を育む教育の充実	命の大切さに気づき、自他の命を大切にしようとする態度の育成	命の大切さに気づかせる場面の設定と学びを深める返しを実践する。	①緊急時の対応について、自助と共助双方の学びを行う。 ②SOSミニレターなどSOSを発信できる環境を整備する。	B	【成果】 避難訓練を行い、緊急時の行動について学習することができた。 【課題】 去年よりも学校評価アンケートの数値は若干下がったため、命の大切さに気づかせる場面をより明確に設定する必要がある。

いじめの防止等	いじめの未然防止と早期発見	いじめの本質に気づき、いじめのない学級・学校づくりに貢献できる意識の涵養	生徒一人一人について理解を深め、職員で情報共有を図る。心のアンケート等の実施と適切な対応を徹底する。	<p>①日常の生徒観察、スコラ手帳等を利用した「生徒の小さな変化や兆し」への目配り気配りを行う。</p> <p>②心のアンケートや教育相談をとおして生徒の状況を細かく掌握する。</p> <p>③学級旗製作や人権ボランティア委員会の活動をとおして、「いじめを許さない集団づくり」を行う。</p> <p>④スクールサインや相談窓口の周知を行う。</p>	B	<p>【成果】 担任や部活動顧問が生徒とよく関わっており、何かあってもすぐに対応ができていた。またアンケートをもとに生徒の状況を常に把握することができた。</p> <p>【課題】 いじめの対応も迅速にでき、解消・見守りができたが、未然防止に更に努めなくてはならないことを感じている。スクールサインは、説明後に各クラスで登録を行い、しっかり周知できた。</p>
特別支援教育	教育相談と一人一人に応じた支援の充実	生徒理解を深め、個別の支援等の実践	生徒理解について情報を共有し、個別の支援体制の確立と実践を行う。	<p>①引継事項等に基づき、特別な支援を要する生徒を把握し、職員間で情報共有を行う。また、高校とも連携を図り合理的な配慮についての見識を広げる。</p> <p>②教育相談等で生徒の困り感を把握するとともに解決に向けた支援委員会を実施する。</p> <p>③不登校や別室登校等に応じた支援についてSCを含めた会議を学期に1回行う。</p>	B	<p>【成果】 中学職員会議での共通理解。健康保健部会や生徒支援委員会での高校との連携を行うことができた。 教育相談やSCを含めた不登校の対策会議を実施し、不登校の改善や予防に努めた。数名不登校の改善が見られた。</p> <p>【課題】 不登校の人数や20日以上欠席している生徒は増えている。今後も対策対応が必要である。</p>

学校保健・学校安全	安全な学校づくり及び自ら健康で安全な生活を実践できる生徒の育成	安全な学習環境の確保と健康的な教育活動の支援	学習環境の整備により、ケガや事故等を未然に防止する。心身の健康について生徒自らが気づき・考え・行動する力を養う。	①定期環境衛生検査や日常点検を行う。 ②ハミガキや爪等の健康課題について委員会が中心となって対策を考え行動する。 ③ストレス対処教育などを実践し、良好な対人関係の構築を図る。	B	【成果】 ストレス対処教育を大学職員やSCを講師として、実施できた。アンケート結果で、困った時に相談すると答えた生徒が35%から55.1%に増えた。 【課題】 健康課題について保健委員が中心となって呼びかけた。しかし、習慣化まで至っていない。
環境教育	環境について気づき・考え・行動ができる生徒の育成	省エネや環境保全に自主的に取り組む態度の育成	生徒自身で教室の環境整備に取り組み、環境ボランティア活動やリサイクル活動を企画・実践できる。	①生徒会が主体となり、SDGsを意識した学校版環境ISOや服のチカラプロジェクトやコンタクトレンズのケース回収活動などのボランティアにも取り組む。 ②美化コンクールの振り返りを通して環境への意識を高める。 ③花壇コンクールなどを通して環境について考え、実践する力を養う。	A	【成果】 生徒会執行部を中心とした「服のチカラプロジェクト」や「コンタクトレンズのケース回収」のボランティア活動を実施し、昨年以上の成果があった。また環境委員の美化チェック、花壇コンクールを実施することでSDGsや学校版環境ISOへの意識づけができた。 【課題】 ボランティアへの参加人数は多いが、全員参加というわけではない。
情報教育	情報リテラシーの涵養	将来にわたって有用な情報活用能力の育成	高校と連携を図りながら、各学期1回以上の情報モラル講演会等を計画・実施する。	①技術家庭での基礎的な学びをはじめとし、他教科や総合的な学習の時間でICT活用を推進する。 ②授業や講演会などで学んだ情報モラルに関する知識を家庭でも共有できるよう、ワークシートの工夫やホームページでの発信を行う。	B	【成果】 情報モラル講演会については、高校と一緒にに行うことができた。ICT活用や情報モラル教育については各教科での指導もあり、保護者の評価も昨年度より10ポイント以上増加している。 【課題】 学校での取組が保護者に伝わっているようではあるが、積極的な情報発信ができない。
読書指導	読書による豊かな感性の育成	読書に親しみ、豊かな感性と幅広い知識を身に付ける。	読書の充実及び図書館利用に肯定感を持つ生徒を9割以上にする。	①図書委員会の活動内容を充実させ、その推進を図る。 ②図書館終礼や図書館だよりの発行により読書活動に関する啓発を	A	【成果】 93%超の生徒が読書指導や図書館の充実が図られていると回答している。図書委員が選出した「本の福袋」や図書館終礼によって貸出率の向上につ

			行う。 ③読書感想文・感想画の取組や各教科での読書紹介などの取組を行う。 ④平均一人15冊以上の貸出を目指す。		なげた。読書感想文・読書感想画に全員で取り組み、多くの生徒が入選した。 【課題】図書館改修中のため、貸出本の制限があるが、生徒が希望する本を多く準備し、要望に応えていく。
地域連携（コミュニティ・スクールなど）	保護者や育友会との連携	各種の通信・学校HP、授業参観等を通した保護者との連携	学校との連携に肯定感を持つ保護者を9割以上にする。	①学級通信の発行のほか、HPの「附属中ブログ」で常に情報発信を行う。 ②授業参観、三者面談等を実施することにより、学校の取組や生徒の様子を保護者に伝える機会をつくる。	A 【成果】95.7%の保護者が学校との連携に肯定感を持っていると回答した。情報発信や個別面談等時機を捉えた対応ができた。 【課題】公開授業期間に、より多くの保護者に来校してもう工夫が必要である。
	開かれた学校づくり	関係機関との連携	総合型コミュニティースクールをはじめ、様々な関係機関との連携により、本校の魅力化等に向けての検討を重ねる。	年間2回以上、学校運営協議会を開催し、各委員から幅広く意見を伺い、学校運営に生かす。	B 【成果】職場体験やボランティア活動などを実施し、生徒の姿を地域に示すことができた。 【課題】学校運営協議会において意見を伺う機会に工夫が必要であった。

4 学校関係者評価

- ・全日制、定時制、附属中学校の連携した学校経営は有効である。今後も学校の在り方について継続して考え続けてほしい。
- ・日常的に高校生の姿を見ながら中学生が学ぶ環境であることは貴重である。中学生の発達段階に応じながら6年間を見据えた指導を今後も期待している。
- ・生徒の活動については、随時発信をお願いしたい。ただし、部活動等、勝利主義にならないようお願いしたい。
- ・アンケートの「本校に入学してよかったです」の項目では、生徒・保護者共に肯定的回答が年々増加しているのは素晴らしいが、否定的回答の理由を探る必要がある。

5 総合評価

令和6年度の本校教育スローガンは『「健康・礼儀・努力・継続」～何事にも一生懸命頑張る玉附生～』とした。

今年度の学校評価表における各項目（18項目）の評価は、A：6項目、B：12項目、C：0項目、D：0項目という結果であった。また、12月に実施した生徒・保護者・職員の学校評価アンケート及び2月に実施した学校評価関係者評価においては概ね高い評価を得ることができた。今後も教育目標の実現に向けて、テーマである「夢実現・未来への挑戦」をキーワードに併設型中高一貫教育校として様々な教育実践に努めていきたい。

過年度に比べ、学校評価における生徒・保護者の満足度は高い傾向にある。昨年度、新型コロナウィルス感染症が5類に移行してから教育活動が制約のない形態で実施できることから、今年度は更に安心して多くの工夫や挑戦ができるようになったことが要因として考えられる。

アンケートの「本校に入学してよかったです」の項目で肯定的な回答をしている生徒が97.1%、保護者が97.6%と概ね高い評価を得ているが、100%ではないことを真摯に捉え、今後の教育活動に努めていきたい。

6 次年度への課題・改善方策

「いじめの未然防止と早期発見」について、生徒の10.6%、保護者の12.9%がやや否定

的な評価をしているのに対し、職員全員が概ね目標を達成できたと肯定的な評価をしている。この認識の差を真摯に受け止め、これまでの取組と認識の差を分析し、日常の教育実践の中でヒントとなるものを得ながら、改善に努めていく。その際、「人権教育の推進」については生徒の97.6%、保護者の95.1%が肯定的な評価をしていることや、生徒の97.6%、保護者の98.7%が安心して様々な教育活動に挑戦することができる工夫がなされると評価していることも含めながら考え、生徒が安心・安全な学校生活を送ることができるよう具体的な実践を強化していく必要がある。

また、「中高6年間を見通した教育活動の充実」について、概ね目標を達成できたと回答したのは中学校職員の81.8%、高校職員の77.1%にとどまった。昨年度の中高一貫教育に関する職員研修では共通理解を図り、今年度は指導体制を可視化し整理を行った。次年度以降は連携した指導体制の構築と具体的実践をより進めていく。